

## E. A. ポウ—想像力と錬金術

奥村直史

[キーワード：①化学結合 (chemical combination)；②賢者の石 (philosopher's stone)；③ユリーカ (Eureka)；④黄金虫 (The Gold-bug)；⑤フォン・ケンペレン (Von Kempelen)]

Edgar Allan Poe (1809-1849) における「想像力」の問題を考える場合、錬金術をどうしても視野に入れなくてはならない。ポウ自身による「想像力」に関する記述は Thomas Moore の *Alciphron* 論 (*Burton's Gentleman's Magazine*, Jan. 1840), *Marginalia* に分類される *Southern Literary Messenger*, May 1849 の記事などに見られる。内容が一貫しているため重複する部分も多いのだが、当時の詩人 N. P. Willis を論じた文章に付された脚注が、より詳細かつ網羅的なポウの想像力論となっている<sup>1)</sup>。これをまず概観し、錬金術との関係を探ってみたい。

まずは、「ファンシーは結合しイマジネーションは創造する」とのコールリッジの区別に反して「両方とも同じくらい創造するし、同時にまったく創造しない」と言う。ポウの天の邪鬼的な気質が発揮されているわけではない。ポウの命題はこうだ。「人間の心は実際に存在しないものは何一つ想

像することはできない。もしそのようなことができるとしたら、神の思念のごとく、観念の上ばかりでなく実質的にも創造することになる。」わかりやすい例として、鷲とライオンの混合体であるギリシャ神話のグリフィンが挙げられている。しかし、文学作品の創造を目指すポウが、万物の創造者である神に憧れることはなかったか。ポウは人知による想像力を否定するのではなく、限定を加えながらも既知のもの組み合わせから、新たな性質を備えたものが生まれることを述べてゆくのだ。「イマジネーション、ファンシー、ファンタジー、ヒューマー」のそれぞれが「結合と新奇性」に関わることをまず断り、なかでも“artist”であるのはイマジネーションだとして取り上げる。既存のもの新奇な組み合わせから「調和のとれたもの」のみを選択し、その結果「美」を生むのがイマジネーションなのだ。

更に「純粋なイマジネーション」へと論は展開される。これは、新奇で最も結合しやすい結合を求めると、出来上がったものの中に、結合される以前のものの性質が、その割合に応じて「原子のように」残る。これが未だ不完全な混合の状態であるのは、次に更なる結合の例が用意されていることからわかる。文学作品としては「剽窃」と呼ばれるであろう段階で、有名な「ロングフェロー論争」を想起させる<sup>2)</sup>。更なる結合の例を以下に見てみよう。

But, as often analogously happens in physical chemistry, so not unfrequently does it occur in this chemistry of the intellect, that the admixture of two elements will result in a something that shall have nothing of the quality of one of them—or even nothing of the qualities of either. The range of imagination is thus unlimited. Its materials extend throughout the universe. Even out of deformity it

fabricates that *beauty* which is at once its sole object and its inevitable tests. But, in general, the richness of the matters combined, the facility of discovering combinable novelties worth combining, and *the absolute "chemical combination"* of the completed mass, are the particulars to be regarded in our estimate of imagination. (下線強調筆者)

イマジネーションが作用する精神世界の現象をボウが「知性の化学」と呼び、物質化学との類推で論じているところが興味深い。両方の領域で同様のことが起こると言うのだ。すなわち二つの元素が結合し、どちらか一方の性質しか持たぬもの、或いはどちらの性質も持たぬ「何らかのもの」ができることがある。つまり、反対概念である「醜さ」からも「美」は生れるのであり、イマジネーションの及ぶ領域は宇宙くまなく広がることになる。

*Eureka* (1848) では宇宙が無限の広がりを見せ、「宇宙こそ神のプロット」だった<sup>3)</sup>。一方、「美」はイマジネーションの「唯一の目的」である。同時に「試金石」でもある理由は、イマジネーションの評価が出来上がった「美」という作品により量られるからだ。イマジネーションの評価として注意すべき点の中で、斜字体で強調されるのは「完全な『化学結合』」である。ここでもまた「化学」なのだ。引用の後には、「調和のとれた文学作品」はあまりに「自明」であるため、鑑識眼のない者からは過小評価されるとのボウの嘆きが続く。

以上がボウの想像力の概要であるが、“chemistry”へのこだわりは、この語が自ずとその関係を示す「錬金術」(alchemy)へのインデックスとなる。アンドレーア・アロマティコは錬金術の基本思想を次のように説明す

る。「地上に存在するものは本来すべて同じ起源（第一質量）を持っている。それが異なる物質として現れるのは、4元素がそれぞれ異なる割合で結合するからであり、天空から地上へ降りてくる世界靈魂の活動がその時々天体の配列によって調整されるからである。」<sup>4)</sup>土、空気、水、火の4元素の割合を整え物質を化合し、「金」を變成するのは「賢者の石」と呼ばれる秘法の物質である。イマジネーションが「美」を生む過程と類似する。

また、ポウはイマジネーションという精神世界の問題を物質化学と結び付けて論じたが、錬金術は精神と物質の両面を扱う。物質面で金の變成を成功させるには、精神面で万物を創造した神に自分を近づけなくてはならないと錬金術師たちは考えたからだ。錬金術師たちの思想の基盤となったのはヘルメス学であり、エジプトでB. C. 3～A. D. 3年にかけて匿名の人々によって『ヘルメス文書』にまとめられた。そこでは、宇宙にも感覚や思考があり「もっぱら万物を創造し、また分解してもとにもどすためだけに働く。宇宙は神の御心をかなえる道具なのである」との宇宙論が展開されている<sup>5)</sup>。ポウの宇宙論と近いのだ。*Eureka*では“a novel Universe swelling into existence, and then subsiding into nothingness, at every throb of the Heart Divine” (307) とされている。ポウにとっても宇宙は神意の顕れであり、その一過程には単一からの無限の拡散そして収縮があった。「最初のものである原初の単一にすべてのものの第二原因が含まれている」(211) とのポウの考えも、錬金術の「あらゆる自然現象やこの世界に存在するすべてのものには、生きた宇宙的エネルギーである第一原因が働いている」<sup>6)</sup>と同質であり、先に触れた「第一質量」とも重なる。ポウが宇宙論の題名に選んだ「ユリーカ」は、純金か否かを見極める方法が発見された時に発せられた言葉なのだ。更に *Eureka* が、「物質的ならびに精神的宇宙論」(211) であったことにも注意したい。

『ヘルメス文書』は、神を感知し理解するための手段として「熱と冷、乾と湿などの相反する性質を自分の中で溶け合わせ」、「時間も場所も、要素も性質も大きさも、すべてをまとめて同時に考える」ことを説いている<sup>7)</sup>。当然、錬金術師たちは「想像力」を重要視した。ヨハネス・ファブリキウスは、ルランドゥスの『錬金術辞典』（1612）が「想像」の定義を「想像は人間の内なる星、天体、超天体」としていることを紹介したあと、錬金術師たちが「化学的変成の過程と歩調を合わせる心的変容の過程として」錬金作業を理解していたと述べている<sup>8)</sup>。「心的変容」とはもちろん神に限りなく近づくことである。*Eureka* の結末では、人間を含めあらゆる生物が、意識を自分自身との同一性から、次第に「神との同一性」（identity with God, 309）へと移してゆくのだ。

また、『ヘルメス文書』に限らず、錬金術書の内容を理解するのは非常に困難であったことにも触れておかななくてはならない。錬金術は秘法であるため、使われる言語は象徴的であったり、アナグラムが用いられたりと複雑で、その暗号を解読できた者だけが必要な知識を得られた。想像力は、神に近づくためにも、また錬金術の文献を読み解くためにも必要となるのだ。*Eureka* では、物理学の領域での探索に疲れたライブニッツが形而上学の領域に乗り出しても「原理」を発見できなかったのは、彼の「想像力（imagination）が十分に発達していなかったか、鍛え方が足りなかったから」（240）とされている。

錬金術的変成の例として興味深いのは、短編“The Gold-Bug”（1843）である。Mark Shell は19世紀に広まったアメリカの紙幣制度を背景に、「自分の作品の原稿用紙を金銭と取り換えることしか望みようのない貧しい作家」としてポウを取り上げ、この作品を論じている<sup>9)</sup>。確かにポウはこの作品を応募することにより雑誌 *Dollar Newspaper* の懸賞金100ドルを手

した。登場人物の Legrand も「紙の様相をした」(appearance of paper)<sup>10)</sup>ものを用いて、埋められていた金貨に辿り着いた。しかし「ただの紙切れ」だと思われていた物質は、実は「羊皮紙」だったのだ。

I have said that the scrap was parchment, and not paper. Parchment is durable—almost imperishable. Matters of little moment are rarely consigned to parchment; since, for the mere ordinary purposes of drawing or writing, it is not nearly so well adapted as paper. (307)

メモ程度のことならば紙で事足りる。重要な内容を書き記すべき媒体が羊皮紙なのだ。「耐久性」といい「永続性」といい、ポウが終生追い求めて得ることのなかった自分自身の雑誌を想起させるのだが、ただの紙ではないところからレグラントの知性を用いた想像力が発揮されてゆく。何かがあるはずなのだ。そして偶然も伴い、暖炉の火に近づけられた羊皮紙は、表面に「髑髏の図」を現わす。「熱が作用したはず」(308) だと考えるレグラントは、語り手にこう告げる。

You are well aware that chemical preparations exist, and have existed time out of mind, by means of which it is possible to write on either paper or vellum, so that the characters shall become visible only when subjected to the action of fire. Zaffre, digested in *aqua regia*, and diluted with four times its weight of water, is sometimes employed; a green tint results. The regulus of cobalt, dissolved in spirit of nitre, gives a red. These colors disappear at

longer or shorter intervals after the material written on cools, but again become apparent upon the reapplication of heat. (308 下線強調筆者)

ザファーに王水そして水を用いて、羊皮紙あるいは紙を媒体とすれば緑色が出る。材料によっては赤色が出ることもあるが、とにかく熱を加えることにより「文字」を出現させる「化学的処方」があるのだ。ポウの想像力論にあった「化学結合」の一例である。加熱は錬金術の重要な手段でもある。現れた文字は、媒体となる物質が冷めれば消えるが、加熱されれば再び現れる。ここに、*Eureka* に描かれている「神の心臓の鼓動ごとに現れては無に帰す」宇宙の萌芽が認められる。

レグランドは次に、髑髏の図とは対角線をなす隅のところに「子山羊」(kid) の絵をあぶり出す。両者の書かれている位置から手紙の形式に思い当たり、髑髏は「印章」で子山羊は「署名」だと推測する。すると「子山羊」はあのキッド (Kidd) 船長で、「髑髏」は海賊のしるしとなる。掠奪した財宝がどこかに隠されているとの噂は有名なのだ。しかし、印章と署名の間に肝心の「文章」(309) がない。羊皮紙に汚れがついていることと関係があるのではないかとレグランドは考え、湯で洗い髑髏の絵を下に向けて鍋に入れ再度加熱すると、数字と記号による暗号文が浮かび上がる。手紙の形式や海賊キッドの事など、既知のことを総動員し想像力を働かせる。この要領で暗号文の解説も進められる。「人間の創意を然るべく適用しても解けないような謎を、人間の創意が作り出すことはない」(311) とレグランドは言う。これは先に見た「人間の心は実際に存在しないものは何一つ想像することはできない」とのポウの言葉と呼応する。アルファベット 26 文字の用いられる頻度、組み合わせ、配列などから理的にレグランド

は想像するのだ。その結果、ついに暗号文を通常の文章に変換することに成功する。その文章も同様の理知的推論により解釈し、宝の埋められた場所を割り出す。掘ってみると箱の中から財宝が出てくる。硬貨はすべて古い時代の金貨なのだ。「化学結合」により創造された暗号文というテキストが、知性を伴った想像力で解読されることにより、埋蔵金に辿り着く。元は「ただの紙切れ」だと思われていた物質からである。これを比喩的に「錬金術」と呼んでもよい。

だがポウは、没年となった1849年に直接錬金術に触れ、短編“Von Kempelen and His Discovery”を発表している。雑誌記事の体裁をとったこの作品は、カリフォルニアへのゴールドラッシュという時事性を利用したポウ得意のホークスとして知られるが、それだけではないだろう。記事の寄稿者を装うポウは、冒頭でフォン・ケンペレンの鉛を金に変える秘訣の発見は「予想外」だと思われているが実はそうではないと「一般の印象」を強く否定する<sup>11)</sup>。ケンペレンの「発見」は、既に出版されている「ハンフリー・デイヴィ卿の日記」に負うところが多いと言うのだ。新たな発見だと思えることも実は既知のものに収斂されるといった考えは、想像力論で確認したところだ。

この作品に“alchemy”という語はないが、「賢者の石」への言及がある。ケンペレンの隠れ家を見ても、錬金作業を行なっていることは確かだ。警察からは偽金造りの疑いをかけられている。部屋には「目的不明の化学装置」が取り付けられ、真っ赤な炎を出す小さな炉の上には一本の管で連結された二つの坩堝がかかっており、片方では鉛が溶かされ、もう片方では「何らかの液体」(328)が猛烈な勢いで蒸発している。「賢者の石」を得るには、様々な物質を「第一質量」<sup>プリマ・マテリア</sup>に還元し、それが黒化、白化、黄化、赤化するまで加熱と蒸留を繰り返さなくてはならないとされた。何を最初の



材料にするのか、錬金術書は曖昧な記述しか残していない。「無知なる者と初心者によって、それはもっとも卑しむべき、つまらぬものと思われている」と『ヘルメス学の博物館』（1678）にはある<sup>12)</sup>。この種の化学実験からは、レグランドも言及した王水が発見されている。ケンペレンは作業の途中で警察に踏み込まれるのだが、直ちに坩堝の中身を床に流してしまう。化合させる物質の割合は絶対の秘密なのだ。警官はケンペレンのポケットから「アンチモンと何らかの未知の物質との混合物」(a mixture of antimony and some *unknown substance*, 329) を押収する。アンチモンは、ある条件が整うと結晶が「星の形状」をとるため多くの錬金術師を魅了した物質だが、そのなかにはアイザック・ニュートンもいた<sup>13)</sup>。ニュートンは *Eureka* のなかでも言及されている。

次に警官は、ケンペレンの寝室に多量の「真鍮らしきもの」(329) を見つける。それは鍵すらない、ごくありふれたトランクの中に入っている。警官たちの脳裏にそれが金ではないかという「途方もない考え」(wild fancy, 329) が浮かぶことはない。レグランドのような知性を伴う「イマジネーション」の持ち主でなければ、金には到達しないのだ。この物質が「貨幣の鑄造に使うものよりはるかに純度の高い」、「卑金属など微塵も混じっていない完全な純金」(330) であることが判明するのは、翌日になってからである。ポウはフォン・ケンペレンの発見とその後の動向を総括し、はっきりしているのは以下のことだと斜字体で強調する。“*pure gold can be made at will, and very readily, from lead, in connection with certain other substances, in kind and in proportions, unknown.*” (330) 「純金」を生む「成分も配合も分からない他の何らかの物質」とは「賢者の石」であろう。“That he has actually realized, in spirit and in effect, if not to the letter, the old chimera of the philosopher’s stone, no sane person is

at liberty to doubt.” (330) と、「精神においてもまた実際にも」ケンペレンが「賢者の石という古い幻想」を実現したことは疑い得ない。「賢者の石」は、卑金属から不純物を取り除き、「純金」を生む完全な調和へと元素を結合させる。ポウの想像力論が錬金術と最も接近するところだ。ポウが「美」と呼ぶ文学作品は、イマジネーションが既知の諸要素を「完全な『化学結合』」へと導き、「調和」を選択することにより生れた。「美」とは、いわばイマジネーションという賢者の石が、作家の心で変成する「金」だと言えるだろう。

ケンペレンの実現が「精神においても」とあるのは、神を感知する心境に至ったことを意味する。「想像」からの「創造」を追求するポウの願望充足なのだろうか。同じ1849年には、詩“Eldorado”を発表し、黄金の国を求めて旅を重ねてきた騎士が、年老いてもその理想郷には辿り着かないことを謳っている。そして死後出版となった“The Poetic Principle” (1850) では、詩人には到達し得ない何かがあるとして、「星を求める蛾の願い」(The desire of the moth for the star) と表現している<sup>14)</sup>。たとえ叶わずとも、ポウが生涯持ち続けたのは、この願いなのだ。

#### 注

- 1) *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, ed. G. R. Thompson (New York: Literary Classics of the United States, 1984) 1126~7. 以下想像力論はこの箇所から引用する。
- 2) ポウには、文壇の大御所ロングフェローとその取り巻きが、ヨーロッパ文学の模倣に終始しているように思えた。Julian Symons はポウの言葉を引用しながら次のようにまとめている。“Longfellow, on the other hand, who was ‘a man of property and a professor at Harvard,’ with ‘a whole legion of quacks under his control,’ was regarded as ‘a poetical phenomenon, as entirely

without fault as the luxurious paper upon which his poems are invariably borne to the public eye.” *The Tell-Tale Heart: The Life and Works of Edgar Allan Poe* (London: Faber & Faber, 1978) 113. ロングフェローの作品が印刷される「高級な紙」に嫉妬すら伺える。

- 3) *The Science Fiction of Edgar Allan Poe*, ed. Harold Beaver (New York: Penguin, 1976) 292. 以下この作品からの引用は本文中にそのページ数のみを記す。
- 4) アンドレーア・アロマティコ『錬金術—おおいなる神秘』後藤淳一訳（大阪：創元社，1997）38～39。
- 5) チェリー・ジルクリスト『錬金術—心を変える化学』桃井緑美子訳（東京：河出書房新社，1996）102。
- 6) 『錬金術—おおいなる神秘』22。
- 7) 『錬金術—心を変える化学』103。
- 8) ヨハンネス・ファブリキウス『錬金術の世界』大瀧啓祐訳（東京：青土社，1995）31。
- 9) Marc Shell, *Money, Language, and Thought: Literary and Philosophic Economies from the Medieval to the Modern Era* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1993) 8.
- 10) *The Fall of the House of Usher and Other Writings*, ed. David Galloway (New York: Penguin, 1986) 307. 以下この作品からの引用は本文中にそのページ数のみを記す。
- 11) *The Science Fiction of Edgar Allan Poe*, 324. 以下この作品からの引用は本文中にそのページ数のみを記す。
- 12) 『錬金術—心を変える化学』48。
- 13) B. J. T. ドブズ『ニュートンの錬金術』寺島悦恩訳（東京：平凡社，1995）194。
- 14) *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, 77.

E. A. Poe : Imagination and Alchemy

OKUMURA, Naofumi

Edgar Allan Poe's argument on imagination shares significant ideas with the Hermetic writings which alchemists held as their doctrine. Alchemists believed that they were able to make pure gold from ordinary materials by mixing the "philosopher's stone," a secret substance which adjusted the proportion of the elements combined. In order to realize the idea, they repeated chemical experiments, such as heating and distilling. Poe points out the importance of the "absolute chemical combination" to create "beauty," an imaginative work. It is produced by the act of imagination, which Poe calls "chemistry of the intellect," just as pure gold is made with the "philosopher's stone." He first suggested the relationship between imagination and alchemy in "The Gold-Bug" and later treated the theme more directly in "Von Kempelen and His Discovery." *Eureka*, Poe's prose poem, also shares a basic idea of the universe with the Hermetic writings, which regard the universe as spiritual as well as material. Alchemists were supposed to perceive God, the Creator, in order to create gold themselves.

(学習院大学大学院人文科学研究科イギリス文学専攻博士後期課程単位取得退学,  
学習院大学非常勤講師)